色葉字類抄における類書の受容

原　卓志

一　はじめに

唐土において撰せられた所謂類書が本邦に将来せられたことに依って、本邦の文壇が計り知れない影響を蒙ったであろうことは容易に想像せられる。そして、それが単に漢詩文等の漢文制作の場だけに留まらず、本邦撰述の古辞書にまで及んでいるという指摘がある。

新撰字鏡は漢字を偏旁に依って部首を立て配列した辞書であるが、部首の配列に当って天文関係、人倫関係、人体関係等の意義分類もなされており、その意義分類が芸文類聚、初学記、白氏六帖事類聚と関連するものであろうことを夙に阪倉篤義氏が指摘せられた。[1] 又、築島裕氏は新撰字鏡に見られる意義分類と芸文類聚との因果関係を説かれている。[2] 更に築島氏は和名類聚抄について、その意義分類が芸文類聚とよく一致しており、芸文類聚、或いは芸文類聚との関連を有する本邦所撰の秘府略が関与するであろうことを想定せられた。[3] 同氏は色葉字類抄畳字門[4]の意義分類にも言及せられ、それが芸文類聚の系列を引いた和書（漢語々彙集）と関係を有するであろうことを述べられた。[5]

右のように本邦古辞書における類書の受容という問題について、個々の類書との直接関係は立証せられてはいないが、意義分類という観点に立って検討せられた先学の御研究に依って、何らかの深い結びつきが看取せられるのである。本邦所撰の古辞書が意義分類において類書を受容していると考えられる以上、進んで、登載せられた語や注記に

ついても類書とのつながりが予想せられる。

本稿は色葉字類抄を取上げて、色葉字類抄における類書の受容をその登載語の面から検討しようとするものである。

二　色葉字類抄における別名

色葉字類抄畳字門には次に掲げるような「——名」と注記される語が登載されている。

①碧落（ヘキラク）天名　（上52ウ3、碧・落に各々入声点有り）

②梁山（リヤウサン）象名　（上75ウ6、梁・山に各々平声点有り）

③草聖（サウセイ）池名　（下53オ4、草に上声点、聖に去声点有り）

これら畳字門において「——名」と注記された語が、各々「——名」の「——」に当る掲出語の下に小書されているということは相坂一成氏の指摘せられたところである。[6] つまり、①「碧落」は、テ部天象門「天（テン）」の下に小書されており、②「梁山」は、サ部動物門「象（サウ）」の下に、③「草聖」は、イ部地儀門「池（イケ）」の下にそれぞれ小書されている。左に掲げる。[7]

○天（テン）他前反　紫微（シヒ）銀漢（ギンカン）　碧落（ヘキラク）　（以下略）（下天象18ウ4、天に平声点、紫に去声点、微・銀に平声濁点、碧・落に入声点、漢に去声点有り）

○象（サウ）平声俗　為（同）梁山（リヤウサン）（下動物44オ3、象に平・去声点、梁・山に平声点有り）

○池（チイケ）千秋　草聖　張芝硯　（以下略）（上地儀2ウ3）

これら小書される語は畳字門においては専ら「——名」と注記されているし、小書される場合には何らの注記も附

されないのが原則である。しかし、次のような例が存する。

○星上声俗貫珠　ホシ　セイ　分位フムキ司夜シヤ巳上星名也（上41ウ1、星に平・上声点、貫・位・夜に去声点、珠・司に平声点、分に去声濁点有り）

○鐘スウ長楽カネ　寺塔也　霜下　九乳　巳上鐘別也（上99オ4、鐘に平声点有り）

○徳銅山トウサム周白シウハク陶朱タウス　猗頓イトム巳上徳別名也（上56ウ1、銅・周・陶・朱・猗に平声点、頓に去声点有り）

「星」について見ると、小書された「貫珠」「分位」「司夜」に対して「巳上星名也」と注されている。「鐘」は「長楽」「霜下」「九乳」の三語に「巳上鐘別也」と注されている。「徳」では「銅山」以下四語に対して「巳上徳別名也」と注されている。

「巳上星名也」という注記は畳字門の注記と通ずるものであるが、後の二例は異なっている。特に「巳上鐘別也」という注記は中途半端である。これは「巳上徳別名也」と同様に「鐘別名也」と注記されるべきものではなかったかと思われるのである。このように考えると「星名也」も「星別名也」となるべきものと考えることができる。[8]

僅かな用例ではあるが、色葉字類抄の編者にとって、小書され、畳字門において「——名」と注記される語は「○○の別名」と意識されていたものである可能性があり、これらの語を指して呼ぶ適当な名称を持たない現在、仮りにこれらの語を「○○の別名」或いは「別名」と呼ぶことにしたい。又、「○○」については、これも仮りに「項目（別名が掲げられた項目）」という呼び方を用いることにする。

これら別名について相坂氏は二巻本世俗字類抄、節用文字を調査された結果、三巻本色葉字類抄独自のものであるとされた。この点に関して二巻本色葉字類抄については、『私の調査では二巻本色葉字類抄との比較はおこなってい

ない。川瀬一馬博士の「古辞書の研究」に収められた写真で見られる範囲（イ部天象門、地儀門）には小書きの名の註記は存しない（節用文字や天理本の二巻本世俗字類抄にも小書きの名は註記されていない）。二巻本ではおそらく小書きの名は存在しないのではないかと予想される。また「古辞書の研究」の中で川瀬博士の示された二巻本と三巻本との畳字門の語数比較から考えて、二巻本色葉字類抄には畳字の名の語もまた存在しないのではないかと疑われるが事実は果してどうであろうか。』と述べられている。[9] 氏の推定は山田俊雄氏も首肯せられたところであり、[10] 私の調査においても確かめられた。つまり、別名は二巻本色葉字類抄の形から三巻本色葉字類抄の形になる間での増補にかかる語群であると考えられる。

三　唐土所撰類書との比較

前節に見てきた別名は各々字音読されるという性格を有している。これは小書された多くの別名に声点や仮名音注が附されていることと、畳字門において字音読語の分類の中に登載されていることに依って首肯せられる。又、次のような例がある。

○蝶入夢（テフ）（荘周夢為胡蝶）野蛾（同）（以下略）（下19ウ1、蝶に入声点有り）

この例は「蝶」の別名「入夢」について「荘周夢為胡蝶」と注されたものである。この注は、荘子斉物論の一節「昔者荘周夢為二胡蝶一、栩栩然胡蝶也。自喩適レ志與、不レ知レ周也。俄然覚則蘧蘧然周也。不レ知、周之夢為二胡蝶一與、胡蝶之夢為レ周與。周與二胡蝶一、則必有レ分矣。此之謂二物化一。」（返点、句読点は私に施した）から出たものであり、「入夢」という別名の典拠を示そうとしたもののようである。

この二点から推すに、別名とは唐土の文献に何らかの典拠を有する語ではないかと考えられるのである。色葉字類抄畳字門に登載せられる語の典拠については、「史記」「顔氏家訓」等多く存するということを峰岸明氏が指摘せら

れた。[11] 別名もその中に含め得ると考えられるのであるが、別名が二巻本色葉字類抄の形から三巻本色葉字類抄の形となる間の同時期に増補せられたと考えられることと、多くの典拠の一々から引用することは労力の点で困難であったであろうと思われることとを考え合せて、類書やその類の漢語々彙集からの引用が想像されるのである。

右のような観点に基づいて色葉字類抄における別名について類書との関係を検討してみることにする。日本国見在書目録に依れば寛平年間までに「修文殿御覧三百六十巻（徐堅撰）」「芸文類聚百（祖孝徵撰）」「翰苑卅巻（張楚金撰）」「初学記三」「編珠録三」等の類書が本邦に将来せられていたことがわかる。又、四庫全書総目に依れば右の他に「北堂書鈔一百六十巻（唐虞世南撰）」「白孔六帖一百巻」等が著録せられている。これらのうち「修文殿御覧」は図書寮本名義抄、香要抄等に引用せられるが佚してその佚文を見るばかりである。又、「翰苑」「編珠録」も佚文を見るのみである。そこで今は仮りに「芸文類聚」「北堂書鈔」「初学記」「白孔六帖」の四書を取上げて比較することにする。[12] 但し「白孔六帖」は唐白居易撰の「白氏六帖事類聚」に宋孔傳が撰した「六帖三十巻」を合せて一書と成したものである。今回の調査では孔傳のものは除き、白居易の「白氏六帖事類聚」の部分のみを用いる。

さて、色葉字類抄において、別名が掲げられた項目は「天」「日」「月」「星」等二百二十八項目（但し「正月名」「二月名」等は「春」に、「美人名」は「美丈夫名」に含めるといった操作を行った）を数える。これらの項目の色葉字類抄畳字門における配列順序を見るに、各々の別名が畳字門内部の意義分類である「天部」「地部」「山岳部」「河海部」等の「部」分類の下に登載されており、その配列順序を云々することは不可能のようである。又、「雑部」末には多くの別名が登載されているが、これも整然とした配列順序を認めることは困難である。しかし、仔細に見るならばサ部、シ部等比較的多くの別名が「雑部」末に登載される部では大よその配列順序を想定できるようでもある。

〔サ部〕

（別名）	（項目）	（分類）
採幢	虹名	天
蒼梧	野名	地
草聖	池名	水
相見	交名	人
三友	交名	人
採薇	隠逸名	人
霜下	鐘名	楽
桑孫	絹名	布帛
珊瑚	牀名	服飾
山梁	鴆名	鳥
蔡倫	紙名	雑文
三尺	釵名	軍器
三徙	宅名	居處
造舟	橋名	水
霜毛	鶴名	鳥
左顧	（亀名）	鱗介
綵錢	（瞿麦名）	植物

〔シ部〕

（別名）	（項目）	（分類）
雀頭	筆名	雑文
入夢	蝶名	蟲豸
紫蓋	嶺名	山
周卜	洛名	水
舒姑	泉名	水
象玉	氷名	水
如愚	聡敏名	人
雀環	報恩名	人
朱輪	貴名	人
周白	富名	人
寿域	正齢名（延）	人
子夜	歌名	楽
泗濱	磬名	楽
入木	書跡名	雑文
手談	囲碁名（棊）	巧芸
晉銀	硯名	雑文
松煙	黒名（墨）	雑文

三品　松名　植物
灑落　落葉名　植物
敘竹　青名　色彩

上黨　墨名　雑文
十二　楼名　居處
相如　璧名　宝玉
十字　餅名　食物
常生　燈名　火
四知　金名　宝玉
蜀江　錦名　布帛
乘軒　鶴名　鳥
燭夜　鶏名　鳥
秋書　鴈名　鳥
紫鱗　魚名　鱗介
紫苺　薔薇名　植物
朱実　桜名　植物
湘水　橘名（橘）　植物
兕觥　盃名　雑器物

〔注〕誤写誤脱と考えられるものについては（　）に包んで掲げた。分類は私に分類名を当てた。

右の如き配列となっているが、大よそ次のような順にその分類名を配することができるであろう。

天　地　山　水　人　楽　雑文　軍器　居處　鳥　鱗介　植物　色彩

ここに取上げた分類名の他に「布帛」「服飾」等があるが、その配列順序を確定することはできない。

この配列順序について唐土所撰の類書のうち、芸文類聚、初学記、白氏六帖事類聚の三書[13]と比較してみると次のようになる。

色葉字類抄	芸文類聚	初学記	白氏六帖事類聚
天	天	天	（天）
地	地	地	（地）
山	山	地	（地）
水	水	地	（地）
人	人	楽	←この間の配列は一致しない。→
楽	楽	人	
雑文	雑文	文	
軍器	軍器	武	
居處	居處	居處	
鳥	菓・木	花草・果木	（鳥）
鱗介	鳥	鳥	（鱗介）
植物	鱗介	鱗介	（植物）
色彩	φ	φ	φ

〔注〕白氏六帖事類聚の分類名は私にまとめて（　）に包んで掲げた。

この比較に依ると、配列順序は芸文類聚、初学記、白氏六帖事類聚の三書ともに全同のものはない。強いて言うならば芸文類聚とよく一致すると言えようか。芸文類聚と一致するという点は畳字門における「部」分類が芸文類聚によく一致しているという築島裕氏の御指摘[14]と関連するもののようにも思われる。しかし、色葉字類抄が「鳥」「鱗介」

「植物」の順であるのに対して、芸文類聚が「草・木」「鳥」「鱗介」という順であることが異なっている。この三つの配列順序については白氏六帖事類聚が一致しているが、それ以前の順序は大きく異なっている。又、色葉字類抄には最後に「色彩」に関する別名が掲げられている。これは比較に用いた三類書の他、北堂書鈔、太平御覧にも存しない分類項目であり、一考を要する問題である。

さて、色葉字類抄において別名が掲げられた二百二十八項目の個々の項目が唐土所撰の四類書の子目として存するのか否かを調査したものが次に掲げる表である。配列の順は芸文類聚、初学記を参考として私に勘案したものである。○印はその項目が子目として存すること、×印は存しないことを示す。（　）に包んだものは項目の字面は一致しないが意味的に通ずると考えられるものである。

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
1	天	○	○	○	○
2	日	○	○	○	○
3	月	○	○	○	○
4	星	○	○	○	○
5	雲	○	○	○	○
6	風	○	○	○	○
	（夏風）	—	—	—	—
	（春風）	—	—	—	—
7	雨	○	○	○	○
8	雪	○	○	○	○
9	霜	×	○	○	○
10	霰（雹）	×	○	○	○
11	露	×	○	○	○
12	霧	○	○	○	○
13	霰	×	○	×	○
14	霞	×	○	×	○
15	虹	○	（虹霓）	（虹蜺）	（虹蜺）
16	春	○	○	○	○
	（正月）	—	—	—	—
	（二月）	—	—	—	—
	（三月）	—	—	—	—
17	夏	○	○	○	○
	（三月三日）	（三月三）	○	○	（三月三）
	（四月）	—	—	—	—
	（五月）	—	—	—	—
	（六月）	—	—	—	—

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
18	（五月五日）	（五月五）	○	○	○
	秋	○	○	○	○
	（七月）	—	—	—	—
	（八月）	—	—	—	—
	（九月）	—	—	—	—
19	（九月九日）	（九月九）	○	○	○
	冬	○	○	○	○
	（十月）	—	—	—	—
	（十一月）	—	—	—	—
	（十二月）	—	—	—	—
20	暮	×	×	×	×
21	昔	×	×	×	×
22	万年	×	×	×	×
23	地	○	○	（総載地）	○
24	山	（総載山）	×	（総載山）	○
25	石	○	○	○	○
26	水	（総載水）	×	（総載水）	○
27	海	（海水）	×	○	○
28	湖	○	×	○	○
29	池	○	×	（混明池）	○
30	氷	○	×	○	○
31	橋	○	×	○	○
32	関	○	×	○	○
33	嶺	×	×	×	×
34	野	○	×	○	○
35	峡	○	○	○	○
36	塵	○	○	○	○
37	泉	○	×	×	×
38	原	×	×	×	×
39	境	×	×	×	×
40	帝	（総載帝王）	（帝王総載）	（総叙帝王）	（皇親）
41	王	（総載帝王）	×	○	○
42	礼	○	（礼総）	（総載礼）	○
43	宴会	（燕会）	（饗燕）	（饗讌）	（宴）
44	歓遊	×	×	×	×
45	報恩	○	×	×	（謝恩）
46	雅楽	（論楽）	（楽総）	○	（楽）
47	歌	○	○	○	○
48	舞	○	○	○	○
49	琴	○	○	○	○
50	箏	○	○	○	○
51	琵琶	○	○	○	○
52	鐘	×	○	○	○
53	磬	×	○	○	○
54	鼓	×	○	○	○
55	笙	○	○	○	○
56	笛	○	○	○	○
57	鐘声	×	×	×	×
58	聖	○	×	○	×
59	賢	○	×	○	○

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
60	忠	○	×	○	○
61	孝	○	×	○	○
62	聡敏	×	×	○	×
63	徳	○	×	×	○
64	帝徳	×	○	×	○
65	智	○	×	×	○
66	賢人	×	×	×	○
67	関白	×	×	×	×
68	盗人	×	×	×	×
69	師	×	×	×	○
70	貴	×	×	×	○
71	富	×	×	×	○
72	貧	○	×	×	○
73	離別	（別）	×	×	○
74	美丈夫	×	×	×	○
75	美婦人	○	×	×	○
76	交	（交友）	×	×	（交友）
77	朋友	（交友）	×	×	（交友）
78	老	○	×	×	×
79	母	×	×	×	×
80	兄弟	（友悌）	×	×	（友悌）
81	兄	（友悌）	×	×	（友悌）
82	弟	（友悌）	×	×	（友悌）
83	医	○	×	×	○
84	卜筮	○	×	×	（卜）

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
85	筆	○	○	○	○
86	紙	○	○	○	○
87	硯	○	○	○	×（筆硯）
88	墨	×	○	○	○
89	詩	○	○	×	○
90	書籍	（書）	○	×	○
91	書跡	（書）	×	（文字）	○
92	図画	（画）	×	×	○
93	幡	×	○	（旌旗）	（旌旗）
94	釼	○	○	○	○
95	箭	○	○	○	（矢）
96	射	○	（射捍）	×	○
97	漁釣	（釣）	×	×	（網罟置羅）
98	農耕	（田獵）	×	×	（農）
99	造作	×	×	×	×
100	仙（人）	（仙道）	×	（僊）	（仙）
101	隠逸	○	×	×	○
102	仏	（内典）	×	○	○
103	僧	（内典）	×	○	○
104	寺	（寺碑）	×	○	○
105	釈教	（内典）	×	×	○
106	経	（内典）	×	×	○
107	城	○	×	（城郭）	○
108	宮	○	×	○	（宮殿）
109	殿	○	×	○	（宮殿）

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
110	楼	○	×	○	○
111	宅	（宅舎）	×	○	○
112	門	○	×	○	（門戸）
113	墻	×	×	（牆壁）	（牆壁）
114	路	（道路）	×	（道路）	（道路）
115	洛	（洛水）	×	（洛水）	○
116	庭	（園・圃）	×	（苑囿・園圃）	×
117	窓	×	×	×	×
118	帷幕	×	（帷）	○	×
119	屏風	○	○	○	○
120	簾	×	○	○	○
121	牀	（胡牀）	○	○	○
122	席	（薦席）	○	○	○
123	扇	○	○	○	○
124	鏡	○	○	○	○
125	舟	○	（舟総）	○	○
126	車	○	（車総）	○	○
127	燈	○	×	○	○
128	火	○	×	○	○
129	履	×	（舄）	○	（履舄）
130	杯	○	×	×	○
131	盃	（盌）	×	×	×
132	杖	○	○	×	×
133	帳	○	○	×	○
134	枕	○	○	○	○

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
135	簟	○	○	○	○
136	酒	○	○	○	○
137	餅	○	○	○	○
138	金	○	×	○	○
139	銀	○	×	○	○
140	玉	○	×	○	○
141	璧	○	×	×	×
142	錢	○	×	○	○
143	錦	○	×	○	○
144	繡	×	×	○	○
145	絹	○	×	○	○
146	絲	×	×	×	×
147	布	○	×	○	○
148	衣（袍）	（衣裳・袍）	（衣・袍）	（衣服）	
149	帶	○	（革帶）	（帶紳）	
150	蘭	○	×	×	（幽蘭）
151	菊	○	×	○	○
152	蓮	（芙蕖）	×	（芙蓉）	○
153	萍	○	×	○	（萍蘋）
154	苔	○	×	○	×
155	李	○	×	○	○
156	桜	（桜桃）	×	（桜桃）	（桜桃）
157	棗	○	×	○	○
158	栗	○	×	○	○
159	梨	○	×	○	○

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
160	橘	○	×	○	○
161	石榴	○	×	○	○
162	松	○	×	○	○
163	柏	○	×	○	○
164	槐	○	×	○	×
165	桐	○	×	○	○
166	柳	(楊柳)	×	○	○
167	竹	○	×	○	○
168	草	○	×	○	○
169	芝	×	×	×	○
170	菱	○	×	×	×
171	薔薇	○	×	×	×
172	藤	○	×	×	×
173	款冬	○	×	×	×
174	(蓋)荻	(荻)	×	×	×
175	瞿麦	×	×	×	×
176	牡丹	×	×	×	×
177	花	○	×	×	×
178	木	○	×	×	×
179	杞	×	×	×	×
180	桂	○	×	×	×
181	落葉	×	×	×	×
182	紅葉	×	×	×	×
183	象	○	×	○	○
184	馬	○	×	○	○
185	牛	×	×	○	○
186	羊	○	×	○	○
187	鹿	○	×	○	○
188	猿	○	×	○	○
189	犀	○	×	×	×
190	虎	×	×	×	○
191	鳳(鳳)	(鳳)	×	(鳳)	(鳳)
192	鶴	○	×	○	○
193	鶏	○	×	○	○
194	鷹	○	×	○	○
195	烏	○	×	○	○
196	鵲	○	×	○	○
197	鴈	○	×	○	○
198	鸚鵡	○	×	○	○
199	孔雀	○	×	×	○
200	鴆	○	×	×	○
201	鴛	×	×	×	○
202	鴛	○	×	×	○
203	鴛	○	×	×	○
204	鵝	○	×	×	○
205	鷗	○	×	×	○
206	鳧	×	×	×	○
207	龍	○	×	○	○
208	魚	○	×	○	○
209	亀	○	×	○	○

番号	色葉字類抄	芸文類聚	北堂書鈔	初学記	白氏六帖
210	蟬	○	×	○	×
211	蝶	（蛺蝶）	×	○	×
212	螢	（螢火）	×	○	×
213	蟋蟀	○	×	×	×
214	虫	×	×	×	×
215	蛾	○	×	×	×
216	東	×	×	×	×
217	西	×	×	×	×
218	南	×	×	×	×
219	北	×	×	×	×
220	白	×	×	×	×
221	黄	×	×	×	×
222	青	×	×	×	×
223	紫	×	×	×	×
224	囲碁	（囲碁）	×	×	（搏碁）
225	延齢	×	×	×	×
226	閑居	×	×	×	×
227	夢	○	×	×	○
228	千里	×	×	×	×

右の表に依って四類書との一致率を見ると次のようになる（字面が異なるものも含める）。

芸文類聚　171／228　七五・〇％

北堂書鈔　63／228　二七・六％

初学記　142／228　六二・三％

白氏六帖事類聚　178／228　七八・一％

この比率からすれば白氏六帖事類聚と最もよく一致する訳であるが、各々の類書自体の分類子目総数との一致率を見ると、芸文類聚が二一％、北堂書鈔が七・五％、初学記が四五・三％、白氏六帖事類聚が一二・八％となり、白氏六帖事類聚との関連を積極的に認めることはできない。むしろ初学記、芸文類聚あたりとの関連が強いとも考えられる。しかしながら、独り白氏六帖事類聚のみに一致する項目（38「原」、79「母」、169「芝」、190「虎」、201「鴛」、206「鳧」）があることや、独り初学記のみにある項目（62「聡敏」、144「繡」）、芸文類聚のみにある項目（141「璧」、170

「菱」、171「薔薇」、172「藤」等）の存在から、初学記や芸文類聚に近い分類子目を有し、更に初学記や芸文類聚より多数の分類子目を有する書との関連を考えなければなるまい。

以上の検討から色葉字類抄の編者がある類書、或いは類書との関連を有する書を参看して別名を増補したと仮定した場合、その書は、意義分類や分類子目の点で初学記、或いは芸文類聚あたりの類書に近い書ではないかと想定せられた訳である。しかし、別名それ自体から見ると、芸文類聚はその埒外に去るものと思われる。その理由は先にも引用した次の例に依る。

蝶 入夢（テフ）（荘周夢為胡蝶）（以下略）（下19ウ1）

これについて芸文類聚は「蛺蝶」の条に次のように記載する。

列子曰、鳥足之葉為胡蝶。荘子曰、昔荘周夢為胡蝶、栩栩然胡蝶。不知周也。俄然覚則蘧蘧然周也。不知周之夢為胡蝶、胡蝶之為周與。（周與）胡蝶必有分矣。此謂物化。（以下略、誤脱と思われる二字を太平御覧に依って補った。）

芸文類聚では右のように「列子」の後に「荘子」を引き、更に右の引用文の後「古詩」「梁簡文帝詠蛺蝶詩」「梁徐防賦得蝶依草詩」を引いている。しかし、この記載には肝心の「入夢」という語がどこにも出現しないのである。つまり、芸文類聚に近い類書に依っていたのでは「蝶」の別名として「入夢」という語は増補し得ないと思われるのである。これに対して初学記、白氏六帖事類聚では各々次のように記載する（割書は〔　〕に包んで本行に組入れる）。

○初学記・蝶

（事対）入夢　戲園〔荘子曰、昔者荘周夢為胡蝶、栩栩然蝴蝶、自逾適志與、不知周也、俄然覚則蘧蘧然周也、不知周之夢為蝴蝶與蝴蝶之夢為周歟、古楽府歌曰（以下略）〕

○白氏六帖事類聚・蝶

入荘周之夢〔荘周夢為胡蝶、栩栩然飛不知周夢為蝶蝶夢為周也〕

初学記には事対として「入夢」「戯園」の二語が掲げられている。又、白氏六帖事類聚では「入荘周之夢」と掲げられ、その下に典拠としての荘子を引用している。白氏六帖事類聚では「入夢」そのものが記載せられている訳ではないが、この二書の如き記載様式を有する文献に依ってこそ色葉字類抄の編者が「入夢」という「蝶」の別名を増補し得たのではあるまいか。

初学記に謂う所の「事対」という形での記載様式の成立、展開について筆者は論を有さぬが、川口久雄氏に依れば、初学記、白氏六帖事類聚以降の類書に承け継がれていくものということであり、[15] 芸文類聚や太平御覧の如き体裁の類書とは系列を異にしているようである。管見の及ぶ範囲で同じく「事対」を取上げた類書には、羅振玉氏編「鳴沙石室古籍叢残」所収の唐写類書三種のうちの第一種がある。これも初学記以降のものであろうと言う[16]（この類書と別名との関係は後に述べる）。又、敦煌本失名類書残巻もあげられる。[17] いずれにせよ色葉字類抄の別名は初学記に謂う所の「事対」と深い関係がありそうである。

次に色葉字類抄における別名の一々を初学記に求めると次のようになる（〔　〕内は項目を示す）。又、白氏六帖事類聚記載のうち、大書部（略々初学記に謂う事対に相当）に存する語には右傍に――を附す。割書部に存する語には═══を附し、「入夢」の如き形の記載には～～を附す。

A、初学記の事対に一致するもの

〔日〕麗天・火精　〔月〕金兎・円璧・水気・金波　〔星〕貫珠　〔雲〕魚鱗　〔風〕銅烏・列子　【夏風】黄雀[18]

〔雨〕商羊　〔露〕五色　〔霧〕豹隠・夢沢　〔春・三月三日〕曲水　〔夏・四月〕麦秋　〔地〕東傾・右動

〔山〕九坂　〔石〕望夫　補天　〔海〕通天・朝宗・積流　〔湖〕青草　〔氷〕象玉・比珠　〔橋〕造舟

〔嶺〕香峯・紫蓋　〔峽〕明月峽　〔泉〕舒姑　〔帝〕垂衣・擊壤　〔宴会〕羽爵・華樽　〔雅楽〕釣天
〔舞〕八佾　〔琴〕流水・落霞　〔箏〕六律　〔琵琶〕馬上　〔鐘〕九乳　〔磬〕泗濱　〔聖〕九徳　〔賢〕恭倹
〔孝〕温席　〔貴〕朱輪　〔富〕銅山　〔貧〕蓬戸・席門　〔美丈夫〕風姿　〔美婦人〕西施・洛川
〔朋友〕同心・連璧　〔兄弟〕易衣　〔卜筮〕三兆　〔紙〕蔡倫　〔硯〕晉銀　〔墨〕松煙　〔書跡〕垂露
〔漁釣〕磻溪　〔仙(人)〕赤松　〔隠逸〕売薬　〔仏〕金乗　〔僧〕弥天　〔寺〕白馬　〔城〕千里
〔宮〕長楽・未央　〔殿〕飛羽・披香　〔墻〕及肩　〔洛〕周卜　〔帷幕〕綺羅　〔屏風〕雲母　〔簾〕白朱・翠羽
〔牀〕珊瑚　〔席〕半月・碧蒲　〔扇〕雉尾・五明　〔鏡〕百錬　〔舟〕鷁首　〔燈〕百枝・常生　〔火〕流烏
〔酒〕宜春　〔餅〕十字　〔銀〕鏤盤　〔玉〕五徳　〔銭〕鵝眼　〔蘭〕燕夢　〔蓮〕千葉　〔苔〕石髪
〔李〕翠質　〔棗〕鶏心　〔梨〕大谷　〔石榴〕紅膚　〔柏〕鬱栖　〔桐〕嶧陽　〔柳〕飛絮　〔羊〕五羖
〔鳳(凰)〕六徳・丹穴　〔鶴〕乗軒　〔鷹〕青骹　〔烏〕陽烏　〔龍〕投杖・銜燭　〔亀〕左顧　〔蟬〕五徳
〔蝶〕入夢　〔螢〕化草

B、初学記の事対に一致せざるも、語が見出せるもの

ア、叙事部に見出せるもの

〔天〕銀漢　〔雪〕六出　〔霜〕青女　〔春〕韶景　〔春・正月〕孟春　〔春・二月〕仲春　〔春・三月〕沽洗
〔夏・四月〕孟夏　〔夏・五月〕仲夏・蕤賓　〔夏・六月〕林鐘　〔夏・五月五日〕端午　〔秋・七月〕夷則
〔秋・八月〕仲秋・南呂　〔冬・十月〕應鐘　〔冬・十一月〕仲冬・黄鐘　〔冬・十二月〕大呂　〔池〕千秋
〔関〕函谷　〔雅楽〕九奏　〔歌〕王豹・子夜　〔舞〕婆娑　〔鼓〕瀧頭　〔忠〕股肱　〔美婦人〕毛嬙
〔漁釣〕忘筌　〔楼〕十二　〔蘭〕同心　〔菊〕酈縣　〔竹〕嶰谷　〔象〕梁山　〔馬〕浮雲　〔鶏〕燭夜
〔鸚鵡〕能言

イ、事対典拠中に見出せるもの

〔山〕鶏籠・熊耳　〔橋〕虹形　〔野〕桃林・蒼梧　〔礼〕揖讓　〔歌〕郢曲　〔富〕陶朱・猗頓　〔朋友〕断金
〔紙〕魚網　〔幡〕進善　〔箭〕白羽　〔射〕飲羽　〔仙(人)〕王母　〔繡〕霞光　〔馬〕驊騮

〔鴈〕南翔・係帛

ウ、詩、賦等の中に見出せるもの

〔雲〕横天　〔雪〕玉塵　〔霜〕暁威　〔秋・九月九日〕重陽　〔笙〕鸞音　〔酒〕金罍　〔李〕成蹊

〔桜〕朱實　〔竹〕淇園　〔鶴〕霜毛　〔亀〕負図

C、初学記に見出せないもの

〔天〕碧落・紫微　〔日〕白駒・照地　〔月〕玉兎　〔星〕分位・司夜　〔春風〕羊角　〔雨〕暗声・斜脚

〔雹〕白微　〔露〕恵沢　〔霰〕銀丸　〔霞〕九光・九疑　〔虹〕採幢　〔春〕艶陽・韶光　〔夏・六月〕晩夏

〔秋・七月〕初秋　〔秋・九月〕晩秋　〔冬・十月〕初冬　〔冬・十二月〕晩冬　〔暮〕黄昏　〔昔〕旧日

〔万年〕桑田変　〔水〕千秋　〔池〕草聖　〔野〕傅巖　〔峡〕貞女　〔塵〕梁塵　〔泉〕台山・蓋嶺

〔原〕白鹿　〔境〕土産・問風　〔帝〕南面・北辰　〔王〕宗枝・戚里　〔礼〕拝迎　〔歓遊〕酣暢

〔報恩〕亀印・雀環　〔鐘〕長楽・霜下　〔笛〕瀧外・落梅　〔鐘声〕鏗鏘　〔忠〕忘家　〔孝〕霜筍

〔聡敏〕不忘・如愚　〔徳〕有隣　〔帝徳〕有截・無為　〔智〕楽水　〔賢人〕吉甫　〔閑白〕博陸　〔盗人〕白波

〔師〕逸才　〔貴〕東閣・蟬冕　〔富〕周白　〔貧〕蝸舎　〔離別〕利盃・祖席　〔美丈夫〕玉山　〔美婦人〕緑珠

〔交〕相見・三友　〔朋友〕智音　〔老〕鮐背・鶴髪　〔母〕母儀・母堂　〔兄弟〕同気・連枝　〔兄〕阿兄

〔弟〕如子　〔医〕扁鵲・華陀（知）　〔卜筮〕楓天・桑地　〔筆〕鶏距・雀頭・紫毫・疎毫・禿筆　〔紙〕白麻

〔硯〕張芝　〔墨〕上黨　〔詩〕文峯・詞林　〔書籍〕竹簡・黄巻　〔書跡〕入木　〔図画〕伝丹・後素

〔釵〕暁霜・三尺　〔漁釣〕渭水　〔農耕〕東作　〔造作〕土木　〔隠逸〕採薇　〔仏〕白毫　〔僧〕桑門

〔寺〕蓮宮　〔釈教〕五時・八教　〔経〕受持　〔城〕萬雉　〔楼〕望海　〔宅〕三徙　〔門〕通徳・懸席

〔路〕世路・接河　〔禁中〕鳳池・綺閣　〔舘〕翹材　〔塔〕露盤・宝鐸　〔庭〕莓苔・踏月　〔窓〕瑠璃

〔鏡〕揚州　〔舟〕龍頭　〔車〕蒲輪・羊柱　〔火〕丹輝　〔履〕瓜田・珠履　〔杯〕白玉・蓮子　〔盃〕兕觥

〔杖〕紅藤・青竹　〔張〕絳沙（紗）・甲乙　〔枕〕虎魄・曲肱　〔簞〕蔪竹　〔酒〕九醞・榴華・藍水・桃花・竹葉・千日・

千旬・十夜・八珍　〔金〕擲地・四知　〔玉〕連城　〔璧〕相如　〔錦〕還郷・蜀江　〔絹〕桑孫

〔糸〕墨子・鬢毛・青州　〔布〕黄潤　〔衣(袍)〕百結・青雲　〔帯〕黄金・赤石　〔菊〕白精・女几　〔蓮〕紅艶
〔苔〕青蘚　〔栗〕固安　〔梨〕金浦　〔橘〕湘水・熟金　〔松〕大夫・三品・千年　〔槐〕芳枝　〔竹〕永安
〔草〕青袍　〔芝〕入室・却老　〔菱〕鏡中　〔薔薇〕紫蕚　〔藤〕包紫・懸粉　〔款冬〕八重・黄花
〔蘆荻〕蘆州・遠岸　〔麥〕採銭　〔牡丹〕紅房　〔花〕梅口・紅葩　〔木〕桐孫　〔杞〕綏山
〔桂〕東園・李門　〔落葉〕乱飛・凋落　〔紅葉〕千寨錦　〔馬〕龍蹄　〔牛〕桃林　〔鹿〕随車　〔猿〕巴峡
〔犀〕通天　〔虎〕牛哀　〔鶴〕成橋　〔鴈〕秋書　〔孔雀〕育彩　〔雉〕山梁　〔鶯〕遷喬　〔鸞〕舞鏡
〔蕊〕衙泥　〔鯛〕白毛　〔鷺〕毛衣　〔鳳〕王喬舄　〔魚〕波臣・紫鱗　〔蟬〕馬后　〔螢〕疑星
〔蟋蟀〕居壁　〔虫〕飲露　〔蛾〕飛蛾　〔東〕朝日　〔西〕夕陽　〔南〕亭午　〔北〕辺塞　〔白〕鵝毛・粉壁
〔黄〕金彩　〔青〕敦竹　〔紫〕藤花　〔囲碁〕手談・王粲　〔延齡〕茅山・寿域　〔閑居〕逃名・請老
〔夢〕呑鳥・懐蛟　〔千里〕一拳

色葉字類抄における別名総数四百二十九を初学記中に求めると、

A 初学記の事対に一致するもの……一一七例

B 初学記の事対に一致せざるも語が見出せるもの

ア 叙事部に見出せるもの……三七例

イ 事対典拠中に見出せるもの……一九例

ウ 詩・賦等の中に見出せるもの……一一例

C 初学記に見出せないもの……二四五例

のようになる。事対と一致するものが全体の二八%と今一つ低比率ではあるが、白氏六帖事類聚と合せて考えると、色葉字類抄における別名が初学記の事対、又は白氏六帖事類聚の事対相当の語と一致するのが一四五例、三四%と比率を高めるのである。

初学記、白氏六帖事類聚に見出せぬ別名が未だ多数を占めるが、これは色葉字類抄の別名の出典が直接にこの二類書に依っているのではないことを示しているのであって、初学記に謂う所の事対との関連を否定するものではない。ちなみに、初学記においては叙事部にのみ記載されている別名が白氏六帖事類聚では事対相当の記載になっていたり（例、六出、青女）、初学記には見出せぬ別名が白氏六帖事類聚では事対相当の記載になる（例、白駒、玉兎）等の例があり、このことから考えると、事対はその記載様式を有する個々の類書によって異なっていると想像される。つまり、色葉字類抄の別名も初学記、白氏六帖事類聚以外の事対という記載様式を持つ他の類書との関係が想定される訳であり、それら類書との関係を検討する必要があると考えられる。

唐代成立の類書のうち右述の条件に叶うものとして先に少々触れた「鳴沙石室古籍叢残」所収の断巻がある。現存の部名は次下の如くである。

王　公主　公卿　御史　刺史　県令　朋友　人才　報恩　兄弟　孝養　喪孝　孝行　孝感　孝婦　喪葬　貧賤
送別　客遊　薦挙　文筆　勤学　宴楽　富貴　酒　高尚　婚姻　重妻　棄妻　棄夫　美男　美女　貞男　貞婦
醜男　醜女　閨情　神仙

これらのうち色葉字類抄における別名の掲げられた項目と一致、或いは意味的に通ずるものは各々傍線、波線を施した十四項目である。

これらと一々の別名とを比較すると、

〔王〕咸里　〔朋友〕断金　連璧（ママ）　〔兄弟〕同気　連枝　〔貧賤〕蝸舎　〔酒〕九醞　竹葉　金罍　〔美女〕西施　緑珠

の十一の別名と一致するものが見出せる。このうち、初学記、白氏六帖事類聚の二書に見出せぬものが「緑珠」の一例である。又、字面が一致しないものの色葉字類抄の別名と典拠を同じくすると考えられるものがある。

〔報恩〕黄雀（色葉字類抄では「雀環」）

〔孝感〕冬笋（色葉字類抄では「霜筍」）

〔神仙〕王鳥（色葉字類抄では「王喬鳥」）

このうち「黄雀」については初学記、白氏六帖事類聚に「報恩」の項目が存しないことから注目される。又、初学記、白氏六帖事類聚に記載されなかった「雀環」「霜筍」の別名が字面を異にしながらもこの類書中に見出せたということは、他の、これまでに比較に用いた類書の中に見出せなかった別名についても唐土にその典拠を求め得る可能性があることを示唆するものである。

以上の比較検討に依って色葉字類抄における別名は、初学記に謂う所の事対と深い影響関係があるであろうことが明らかになった。しかし、別名の総てが初学記、或いは白氏六帖事類聚に求められる訳ではなく、今回比較に用いた唐土所撰の類書との直接の関係を想定することには無理がある。従って、意義分類や意義分類子目において、初学記や白氏六帖事類聚のそれとは異なっており、事対という記載様式を有する他の書との関係が別に想定せられなければならない。

四　本邦所撰類書との比較

唐土における類書の撰述の影響を受けて本邦でも類書の撰述がなされている。本朝書籍目録に依れば、「群書要覧四十巻（大江音人卿奉勅撰）」「秘府略千巻（貞主卿于時東宮学士因幡介與諸儒撰集）」「会分類聚七十巻（菅原是善卿撰）」の名が見える。しかし、群書要覧、会分類聚の二書は佚して伝わらず、秘府略も巻第八百六十四（百穀部中）、巻第八百六十八（布帛部三）が存するのみである。この他に本邦所撰と目される類書に、幼学指南抄（平安時代中期写）が完本ではないが存している。又、鎌倉時代後期の書写であるが、佚名類書が高山寺に蔵せられている。

以下、秘府略、幼学指南抄、高山寺本佚名類書と色葉字類抄における別名とを比較する。(20)

(1)秘府略との比較

秘府略は千巻のうち二巻が現存するのみである。意義分類及び子目は次の如くである。

（巻第八百六十四）
百穀部中
黍　稷　粟　穄　粱

（巻第八百六十八）
布帛部三
繡　錦

築島裕氏は芸文類聚の意義分類と比較されて、「百穀部」「布帛部」の二つの名称、配列が一致することと、秘府略全巻の中での「百穀部」「布帛部」の場所が巻尾近くに位置することに依り、秘府略と芸文類聚とで部類の名称、配列の上で相当な一致があったと推定せられている。又、「『芸文類聚』を粉本としてこの部類が設定されたかとも思われる。」と述べられている。[21] しかし、子目を見るに芸文類聚では、

百穀部
穀　禾　稲　秔　黍　粟　豆　麻　麦

布帛部
素　錦　絹　綾　羅　布

となっており、意義分類上の部類の名称、配列は一致しても子目にあっては異なっていることになる。

ところで、秘府略と色葉字類抄における別名を比較すると、項目については布帛部の「繡」「錦」ともに別名が掲げられた項目と一致している。しかし、内容について見ると、秘府略には初学記に謂う所の事対という記載様式が存

せず、このことによって秘府略と色葉字類抄の別名との関係は想定せられない。

(2)幼学指南抄との比較

幼学指南抄については夙に川瀬一馬氏が『古辞書の研究』の中で紹介せられており、同氏に依る覆製本附載の解説もある。[22] 築島裕氏はこの書の各巻の部立てが芸文類聚とよく一致することを指摘せられ、芸文類聚、秘府略、幼学指南抄の三者が関係ありと仮定すれば、

芸文類聚→秘府略→幼学指南抄

という系譜が辿られるかもしれないと説かれている。[23] しかし、内容からすれば、そこには初学記との関係が見出せそうである。

幼学指南抄は各部の分類子目の後、漢語を掲出しその後に典拠を示すという体裁をとる。例えば巻二、天部下の「雨」の条では、

○雨

時若（尚書の引用）
月離畢（毛詩の引用）
商羊舞（家語の引用）
蛾穴知（東観漢記の引用）
不破塊（西京雑記の引用）
不鳴條（塩鐵論の引用）
請彭祖室（抱朴子の引用）
興臥石（盛弘之荆州記の引用）

濯枝（風土記の引用）
太平十日（京房易の引用）
黄梅（纂要の引用）
鸛鳴（毛詩の引用）
魚喚（淮南子の引用）
土龍（淮南子の引用）
石蕪（湘州記の引用）
含水（楚国先賢伝の引用）
黒蜈蟯（淮南子の引用）
…

のように記載される。これらのうち「商羊舞」「濯枝」「鸛鳴」「魚喚」「土龍」「石蕪」「含水」「黒蜈蟯」は初学記の事対に一致しており、「月離畢」「蟻穴知」は字面が異なっているが、典拠が同じことからやはり初学記との関係を認めても良いと思われる。

このように幼学指南抄は、築島裕氏の御説に依れば意義分類上、芸文類聚と関係するもののようであり、内容上、初学記の影響を蒙った類書であると考えられる。

さて、幼学指南抄と色葉字類抄における別名とを比較する訳であるが、幼学指南抄現存二十三巻のうち現製された七巻との比較とする。[24]

幼学指南抄の意義分類子目と色葉字類抄における別名の掲げられた項目とを比較すると次のようになる（傍線を施したものが一致するもの）。

（巻二）天部下

雨　雲　霞　霧　露　霜　雪　雹　雷　虹　蜺　霽　晴

（巻五）水部

惣水　海　河　江　湖　池　泉　濤　潮　陂　溝　渠　渕　灘　井　氷　橋

（巻十六）武部上

旌　旗　剱　刀　匕首　鋏　箭　弩　甲　鞍　轡　鞭

（巻十九）儀飾部

節　黄鉞　鼓吹　相風　漏尅

服飾部

帳　屏風　幔　帷幕　簾　牀　簟　席　案　几　杖　扇　枕　被　如意　胡床　火籠　香　香鑪　歩摇　釵

梳枇　嚢　鏡　榻

（巻廿二）宝貨部上

宝　金　銀　珠　玉　珪　璧

（巻廿五）穀粟部

穀　禾　稲　稃　黍　粟　豆　麻　麦

菜蔬部

葱　韮　蒜　薑

（巻廿七）草部

草　藤　荷　萱　萍　昌蒲　杜若　蘭　菊　苔　竹

木部

木 松 柏 槐 柳 桐 桂 桑 花 葉

一致する項目が五十項目である。色葉字類抄の項目のうち幼学指南抄の「天部下」「木部」にそれぞれ登載されてしかるべき「霰」「杞」が存しないが、初学記等に比して初学記等には存しない「泉」「壁」等の項目が一致していることより、かなりよく一致しているという印象を受ける。

次に一致する各々の項目における別名について幼学指南抄と比較してみる。

項目	別名	幼学指南抄
雨	商羊	商羊舞
	○暗声	×
	○斜脚	×
雲	横天	×
	魚鱗	魚鱗
霞	○九光	九光
	○九疑	×
霧	豹隠	玄豹隠
	夢沢	夢沢
露	○恵沢	×
	五色	五色
霜	暁威	×
	青女	青女
雪	六出	六出
	玉屑	×
雹	○白微	×

項目	別名	幼学指南抄
虹	○採幢	×
水	○千秋	×
海	通天	(天河通)
	朝宗	江漢朝宗
	積流	×
湖	青草	青草
池	○草聖	×
	千秋	萬歳千秋
泉	○台山	×
	舒姑	舒姑
	○蓋嶺	×
氷	象玉	×
	比珠	×
橋	虹形	〔虹形〕
	造舟	〔造舟〕
幡	進善	〔進善〕

項目	別名	幼学指南抄
剱	○暁霜	×
	○三尺	×
箭	白羽	×
射	飲羽	飲羽石梁
張	○絳紗	制絳紗
	○甲乙	甲乙
屏風	雲母	五倫雲母
帷幕	綺羅	×
簾	白珠	白珠
	翠羽	翠羽
牀	珊瑚	珊瑚
簟	○蔚竹	×
席	半月	半月
	碧蒲	碧蒲
杖	○紅藤	×
	○青竹	×

項目	別名	幼学指南抄
扇	雉尾	雉尾
	五明	五明
枕	○虎魄	虎魄亀文
	○曲肱	×
鏡	百錬	百錬
	○揚州	×
金	○攪地	×
	○四知	揚震四知
銀	鏡盤	×
玉	○連城	×
	五徳	著五徳
璧	○相如	藺相如持之
草	○青袍	色似青袍
藤	○包紫	×
	○懸粉	×
蓮	○紅艶	×

萍	千葉	千葉	苔	女几	女几山	木	○桐孫	×	柳	飛絮	×
	○青蘋	×		郿縣	南陽郿縣甘谷	松	○丈夫	五丈夫	桐	嶧陽	嶧陽
蘭	同心	同心		石髮	石髮石衣		○三品	×	桂	○東園	×
	燕夢	（燕姑夢）	竹	嶰谷	嶰谷		○千年	〔千年〕		○李門	×
				淇園	淇園	柏	鬱栖	×	花	○梅口	×
菊	白精（日）	日精		○永安	×	槐	○芳枝	×		○紅葩	×

〔注〕（　）で包んだものは字面が異なるもの。〔　〕で包んだものは典拠の引用文中に見られるもの。
○印は初学記に見えないもの。

別名八十七のうち幼学指南抄の掲出漢語に見られるものが四十例であり、典拠の引用文中に見られるものを含めると四十五例の一致となる。これは、この部分における初学記の一致例四十六例をやや下回るものの、初学記に見えず幼学指南抄に見られる別名が「九光」「絳紗」「甲乙」「虎魄」「四知」「相如」「青袍」「女几」「丈夫」「千年」と存することが注目せられる。しかし、別名の総てを網羅することはできず、色葉字類抄の別名を増補する際に参看した類書があったと仮定した場合、その類書に近いものとは考えられても、そのものとは言えない。

(3)高山寺本佚名類書との比較

高山寺蔵の佚名類書は重要文化財指定（I部257号）の鎌倉時代後期書写の零巻である。本書の成立について近藤泰弘氏は、

○書簡用として初学記を縮約したもの（幼学指南抄と類似のもの、但し別書）。
○初学記中の「事対」のみをとり出し、対句を分離して、出典注を簡略にした。
○各項目末[25]に他の出典の熟語を加えた。

と述べられた。[26]

本書は首尾を欠いており、その全容を窺い知ることはできないが、冒頭に目録が残存しており、現存部分と目録からある程度の構成が知られる。

現存部分を掲げる。

（乾象部）

星（末尾のみ）　雲　風　天河　雨　雪　霜　露　霧　霞　晴

（歳時部）

春　夏　秋　冬　元日　寒食　三月三日　五月五日　伏　七月七日　九月九日

（地形部）

地　野　関　塵　山　嶺　峡　原　石　巌　沙（末尾欠）

又、目録に存するのは次のとおりである。

（帝戚部）

王　□

（職官部）

太師　太傅　□……□　侍中　黄門侍郎

給事中　□

（人部）

聖　賢　忠　孝　義　智　信　□……□　言語

心　笑　恭敬　礼　勇　壮　友悌　交友

聡敏　寵幸　報恩　褒誉　貴　富　貧

隠逸　離別　行旅　美丈夫　□

（□）

弾碁　搏　方術　卜筮　卜相　医　夢

変化

この他、本書の記載事項（割書部）の中に、「見天部」「見日部」「見窓部」「見氷部」「見歌部」「見射部」という参照注記があり、これに依って現存部分と目録に依って知られる以外に、天・日・氷・窓・射・歌の各子目が存したことがわかる。

これらの子目の中には初学記には見られぬものがある。次に掲げる。

天河　霞　野　塵　嶺　峡　原　巌　沙　義　智　信　心　笑　勇　壮　寵幸　報恩　褒誉　隠逸　行旅　弾碁

搏　方術　卜筮　卜相（但し、初学記には「卜」あり）　夢　変化　窓　射

これら初学記には見えない子目のうち色葉字類抄の別名が掲げられた項目に一致するのは右傍線を施した十三例である。これからすれば、初学記よりもはるかに高い一致率を示すものと思われる。

次に個々の別名について現存部分と比較する。

項目	別名	佚名類書	項目	別名	佚名類書	項目	別名	佚名類書	項目	別名	佚名類書
雲	▽横天	横天	雨	○暗声	×	霞	▽青女	青女	春	○九疑	九疑
	魚鱗	魚鱗		商羊	商羊舞	露	○恵沢	×		○艶陽	×
風	銅烏	銅烏	雪	○斜脚	×	霧	五色	五色		韶景	（韶景）
	列子	列子御27		▽六出	六出		豹隠	豹隠		○韶光	韶光
	黄雀	黄雀風		▽玉塵	玉塵		夢沢	夢沢		▽孟春	（孟春）
	○羊角	羊角	霜	▽暁威	暁威	霞	○九光	九光	（正月）（二月）	▽仲春	（仲春）

（三月）	▽沽洗	×		○初秋	（初秋）		▽大呂	×	
（三月三日）	曲水	曲水	（八月）	▽仲秋	（仲秋）	地	東傾	東傾	野
夏（四月）	麦秋	麦秋		▽南呂	×		右動	右動	
	孟夏	（孟夏）		○晩秋	×	山	▽鶏籠	鶏籠	
（五月）	▽仲夏	（仲夏）	（九月）	▽重陽	重陽		九坂	九坂	峡
	▽蕤賓	×	（九月九日）	○初冬	×		▽熊耳	×	
（六月）	○晩夏	×	冬（十月）	▽応鐘	×	石	望夫	望夫	塵
	▽林鐘	×	（十一月）	▽仲冬	（仲冬）		補天	補天	原
（五月五日）	▽端午	×		▽黄鐘	黄鐘	関	▽函谷	（函谷）	
秋（七月）	▽夷則	×	（十二月）	○晩冬	×	嶺	香峯	〔香鑪〕	

	紫蓋	紫蓋
	▽桃林	桃林
	○傅巖	傅巖
	▽蒼梧	蒼梧
	○貞女	貞女
	明月峡	〔明月〕
	○梁塵	〔動梁上〕
	○白鹿	白鹿

〔注〕別名のうち○印を附したものは初学記に見えないもの。▽印を附したものは初学記の事対以外のところに登載されるもの。佚名類書の欄で（　）で包んだものは割書部に見えるもの。〔　〕で包んだものは字面が異なるが典拠等が同じであると考えられるもの。

春・夏・秋・冬の四項目（歳時部）では一致しないが、その他の項目では三十六の別名のうち三十二例が一致、又はほぼ一致しており、初学記には見えなかった「羊角」「九光」「九疑」「傅巖」「貞女」「梁塵」（但し、佚名類書では「動梁上」という形である。同出典にかかると考えて一応ここに含めておく。）「白鹿」が見出される上に、初学記では事対として掲げられていない「横天」「六出」「玉塵」「暁威」「青女」「鶏籠」「桃林」「蒼梧」の各語も大書で掲出せられているところは注目に値する。幼学指南抄と比べると、幼学指南抄で掲出されない「横天」「九疑」「暁威」「玉塵」が佚名類書に見える。

これらの点からすれば、この佚名類書はこれまでに比較してきた類書の中で、色葉字類抄の別名の増補に際して関与したと推定せられる類書に最も近いものと言い得るのではないだろうか。本佚名類書の書写が鎌倉時代後期であり、平安時代末までに本書の祖本が成立していたのか否かということについては調べる手立がない。又、分類子目に

関して、「霰」「雹」の子目が現存部分に見えない点、「水」「海」「池」の子目が本書の子目として存したのかどうかという点も問題である。しかし、色葉字類抄に登載せられた別名が多くこの佚名類書に拾える点から考えて、この佚名類書に近い体裁を有する類書が、別名の増補に際して何らかの関係を有したであろうとするのはあながち考えられないことではないと思うのである。[28]

五　む　す　び

三巻本色葉字類抄における別名の増補について、そこに類書の存在を仮定し、その類書と別名との関係、その類書の体裁を現存の類書との比較に依って検討してきた。

その結果、色葉字類抄における別名は唐土の文献にその典拠を求め得るものが多く、それらは初学記に謂う事対と深い関係を有するものであろうと考えられた。又、色葉字類抄の別名の増補に際して関与したであろう類書の体裁を推定するに、芸文類聚や初学記の意義分類に近く、それらが有する以上の子目を持ち、更に、初学記の如く事対を掲げて編まれた書であろうと考えられた。そして、現存の類書の中でその体裁に最も近い姿を持つものは高山寺本佚名類書であろうと推定した。

右の検討は色葉字類抄の編者が類書を参看したと仮定した上のものである。もっとも、右の検討に依っても別名の増補に関与した類書を特定し得た訳ではなく、直接関係を論じ得た訳ではない。しかし、右に見てきたような結果から、間接的にでも色葉字類抄における類書の受容の一端が窺われると思われる。

注

(1)　阪倉篤義「辞書と分類」国語国文19—2、昭和二十五年十月。

(2・3)　築島裕「古辞書における意義分類の基準」『品詞別日本文法講座10　品詞論の周辺』所収、昭和四十八年六月。

（4）「門」という呼称は「部」とすべきものとも考えられるが、畳字の下位分類において「部」の呼称が用いられており、まぎらわしいため本稿では畳字等の最上位の意義分類に対して「門」という呼称を用いる。
（5）注（2）文献。
（6）相坂一成「色葉字類抄の一語彙群」国語学三十三輯、昭和三十三年六月。
（7）「シヒ」「ヘキラク」「キンカン」の仮名音注は各々「紫微」「碧落」「銀漢」の右傍にあるが、印刷の都合上各々の下に掲げた。以下の用例においても印刷の都合で私に改めたところがあるが、一々について注することは省略する。
（8）用例の「徳」に附された「銅山」以下四語は、ト部人事門56ウ1において最上位の掲出字である「富」に附されるべきものであり、「富」に附された「有隣」は「徳」に附されるべきものであることが畳字門との対応に依って知られる。従って、「銅山」以下四語に対して「徳別名也」と注するのは誤りであるが、「別名」の呼称については問題とはならないと考える。尚、この類の誤りの他、誤写・誤脱等が少なからず存するが一々についての注は紙幅の都合上割愛した。
（9）注（6）文献。
（10）山田俊雄「色葉字類抄畳字門の語の注「一詞」の意義（追加）」成城国文学論集第十四輯、昭和五十七年三月。
（11）峰岸明「三巻本色葉字類抄解説」『色葉字類抄研究並びに総合索引』附載、昭和五十二年八月。
（12）各書のテキストとしたものは次のとおりである。
芸文類聚、胡纘宗序本を底本とした点校本。中文出版社刊。
北堂書鈔、孔広陶刻本影印。中文出版社刊。
初学記、宋刻本影印（一部明刻本）。芸文印書館刊。
白孔六帖、明嘉靖刻本影印。各大書局刊。
（13）北堂書鈔は他三書に比して大きく異なった配列となっている。「帝王部」に始まり「天部」「歳時部」に終り、又、動植物に関する部も有さぬため、比較の対象から除外した。
（14）注（2）文献。
（15）川口久雄『真福寺本文鳳鈔』附載解説、大東文化大学東洋研究所刊、昭和五十六年三月。
（16）山崎誠氏の御教示に依る。
（17）川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究』附載の図版に依る。

(18) 初学記の「天」「夏」の各子目の下に事対として登載せられる。
(19) 初学記では「西子」に作る。
(20) テキストとしたのは次のとおりである。
秘府略、続群書類従巻第八百四十三、八百八十四所収本。
幼学指南抄、原装影印古典籍覆製叢刊所収覆製本。
高山寺本佚名類書、松本光隆氏に御貸与いただいた写真。
(21) 注(2)文献。
(22) 注(20)覆製本附載。
(23) 注(2)文献。
(24) 台湾故宮博物院蔵の八帖、並びに残巻三帖のポジフィルムを山崎誠氏より御貸与いただき調査することができたが、紙数の都合に依って割愛した。論旨には影響しないと思われる。
(25) 本稿に言う子目に当る。
(26) 昭和五十七年七月、高山寺において口頭発表せられた時の発表資料に依る。発表資料は松本光隆氏に御貸与いただいた。
(27) 「黄雀風」は「夏」の下に登載せられる。
(28) 山崎誠氏に依れば、本書は初学記を基に据えつつ他の類書より熟字を抄出して加え、或いは編者に依る添注も窺えるものという。そして、初学記以外では白氏六帖事類聚、翰苑との関連を想定せられた（広島大学国語国文学会春季研究集会、昭和五十九年六月十七日）。このような性格を有する類書が他にも存したであろうことは想像に難くない。

〔附記〕
本稿を成すに当って、小林芳規先生には終始御指導賜った。又、山崎誠、松本光隆両氏には資料を御貸与いただき更に貴重な御助言を賜った。高永茂氏にも何かとお世話になった。ここに並び記して深くお礼申し上げる次第である。

On the acceptance of Ruisho (類書) in the Irohajiruishō (色葉字類抄)

Takuji HARA

It is probable that the Kojisho (古辞書) compiled in our country were subject to the influence of the so-called Ruisho (類書) which were brought into Japan from China. It has been indicated that the Irohajiruishō (色葉字類抄), one of the Kojisho, is an example of this influence. It has relation to Ruisho in its method of classifying definitions.

In this paper, I went a step farther and approached the study of the acceptance of Ruisho in the Irohajiruishō, by analysing not the classification of definitions but the vocabulary entries themselves.

The data discussed in this paper suggest that words noted as '——名', namely Betsumjō (別名), contained in the Irohajiruishō-jōjimon (色葉字類抄畳字門), are closely connected with Jitsui (事対) in the Shogakuki (初学記). The data also suggest that the Kōzanjibon-Itsumeiruisho (高山寺本

佚名類書) may be regarded as the Ruisho retaining the style considered most resemblant to that of the Ruisho not now in existence but probably the authority for these Betsumjo.